

あ遭う 小林 976
 新聞 印 坂キブル 4/5
 ④ 4603 せあめ
 藤原 化 友 乱
 ④ 4600
 4,574
 994
 941
 1192
 4597, 4600
 そうとくふ 総督府 1293
 ④ 4570
 どの 22 次 22 19

大宰府遺構の謎

大宰府の都市計画の概要について、は先に熊水たか、その遺構の面から少し詳しく見てみることにしたい。

万葉集に「遠の朝廷」とうたわれ、続日本紀に「天下の一都会なり」と称讃景観をたのしむ水た九州全域の総督府と大宰府は、どのような歴史をたどったのだろうか。

長きにわたり繁栄を続けた大宰府は、天

慶四年（九四一）五月、南海の大海賊「藤原純友」による、いわゆる「純友の乱」において、海賊達の手によりあつけなく灰にされてしまった。

「再建さ小お」今日に至っている。この政府は

というのが従来の定説だった。（「朝日新聞」

昭和五六年七月十九日付、「大宰府」参照）

つまり、大宰府に関する文献から言えば、大宰府は、創建の時から「純友の乱」の

平安中期の

525 大宰府 平安中期の宮人とお

順19 文献によると

新刊切抜き 7/19 4,575P

時点まで、火災に遭っておらず、
 現在大宰府の地に残る礎石などは、日純友の
 乱口の時の焼土の上に、焼けたままの状態
 のまま、今日に至っている。
 ように見受けられ、二水を疑う者など誰もい
 なかった。

米

ところが昭和四十三年からの発掘調査の結
 果は、こうした従前の考えに対して、大幅な

修正を迫るものであった。

■雑草のなかで露出していた中門跡の礎石の
 下、六十センチで新しい礎石を発見し、こ

うに十センチの真赤な焼土層が、
 その辺りから出た。おまけに、下層目の
 礎石の下から、柱の穴が並んだ整地層まで現

われた。
 ■即ち、昭和三十六年七月十九日付朝日新聞参照
 政庁は三度建てられ、第二期分（朝堂

院形式）が焼け落ちた後に、第三期分（同
 く朝堂院形式をもつ建物）が再建された。

分かったのである。
 ということが

天のき
改行

新聞切抜フル 4/5
西都大宰府 9/6

4,576

西都大宰府 95
承平天慶乱 元1108

新聞切抜フル 3/5
大宰府

この調査結果は、一体、どのような歴史の推移を物語っているのだろうか。これは、従来の常識では理解し得ない、難問である。

一期、二期は中央政府の手で建てられたとしても、だれが三期目を再建したかである。

関東にあって中央に反抗した平将門の乱と西国の藤原純友の乱とを合わせて、承平天慶の乱と云う。

衰えが要因とされる。大宰府として、そんな中央政府に復旧の力は無い。

とばかりえ

大宰府炎上後に「大宰府は再建されている」という「明白な」動かぬ証拠が出たからには、誰かが朝堂院形式をもつ政府を再興した筈である。

大宰府発掘調査の結果が出た後に、何冊か出版された研究書は、この点に悩みをみせる。

そして最近、ついには答えに窮した。

在地勢力の有力者が再建したの、だろうか。

とする仮説も出るに至った。

地元の有力者が、大宰府に中級官僚として入り込み、実力を蓄えていたが、彼らには、

前々々々々

改行

改行

4,577^P-1/2

西都...95^P 西都97^P

フルー切板 3/5
西都大宰府 96^P

へ權威の象徴である政庁を再建し、自ら
の衰退を防ぐ必要があつた。
というのである。(「朝日新聞」昭和五六年
七月十九日、「西都大宰府」藤井明徳、日本放送
出版協会、九六頁参照)

最も整然とした朝堂院形式をもつ建物配置と
火災で堆積した焼土層を片付け、整地し、
かも第二期の建物の不整合を是正し、一部で
は規模を拡張しての復興である。

位置で嵩上げするに当り、礎石を新た
に据え置き、回廊にみられるとおり第二期
の梁行と桁行の不揃いを桁行十三尺に統一し
てある。また南門は、基壇部を作りなおし、
しかも第二期より一辺六〇センチメートル拡大して築
かれてゐる。第二期より充実した政庁の姿と

いえよう。(「西都大宰府」藤井明徳、日本放送
出版協会、九五―九七頁参照)
■平安後半期における律令国家廢頽の時期に
一体何人が、そのように立派な大宰府政庁を

みかけだお
見掛倒る 2106^P

4.577^P-2/2

おあがり
大掛広 272^Pと
苦肉 636^Pのみ

きょうかく
驚愕 566^P

再興さいこうすることか出来たのだろうか。
■発掘調査はつくつさぎによつて明らかになつた驚愕きょうかくすべ
き事実じじつをバ、なんとか筋道すぢみちをつけ、理解りかいしよう
と試みての苦肉くにくの仮説かせつではあろうが、
13.5^{km} 在地勢力ちせいりきの有力者りきりやが、自らの衰退すいたいを防ぐ
為ため、何と大掛りおあがりにも、
・第二期だいにきの焼土層やけどどそうを片付け、
・第二期だいにきの礎石そせきを覆う土盛りつちもを行ない、整
地ちして、新たな礎石そせきを据え、
・第二期だいにきの建物の不整合ふせいごうを是正せいせいし、一部いちぶでは
規模きぼの拡張かくちやうを行ない、
より整ととのった、大宰府政庁だざいふせいぢやうを建立こんりやうした
などということが、果して本當ほんとうに有り得たので
あろうかと疑問視ぎもんしされる。
■なるほど、指播さしはされているとおりで、
①支配機能しはいきんのうが低下ていかしてしまつた中央政府ちやうおうせいふに、大宰
府復興ふくこうの力は無かつたであらう。
②また、地元じよんの有力者りきりやが、自らの財力さいりきを投入とうりゆ
し、見かけ倒みかけだおりのものでなく、従来じゆんらいより以
上に立派りつぱな日朝堂院形式にちちやういんけいしきの都府楼とふろうを造営ぞうえいし
たと考えにくい、

H29(2017)4.17(月)~23(日)
 H30(2018)11.6(火)~11.7(水)
 H31(2019)4.15(月)~4.15(水)
 令和2(2020)6.5(金)~6.6(土)

4,578^P

天つき
改行

1/6 1F 1/6
 6/5

*

ように思われる。
 そうですね、どう解釈するのかが妥当であろう
 か。
 思われる。無謀なことでつけだすと批難される
 とであろうか、―――暴論を承知で、あえて
 思うところを、以下述べてみることにした
 こと。

→ H 9.3.21 (金)
H 5.8 18.4 (土)

① 4553⁹

天つぎ
改行

4,579^P - $\frac{1}{2}$ (4) 4568⁺

「近江宮」紀下380'

④ $240 \frac{4}{5}$
169

大宰府の盛衰

解本のとおり

天智天皇の近江宮は、
―――
庚は、
近江

国（滋賀県）の大津にあったわけではあるま

15

と推察される。

その
う
で
は
な
く

中大兄は天智六年（六六七）三月に即位

同年三月十九日に筑紫の大津宮に都を

定められた。……しかし故あって、皇太子大友皇子

加、翌年の天智七年(六六八)正月三日に即位

して、その後大宰府を都（副都）とされた

と解いた

それでは、これより、
日本書紀

天智七年正月条以下に見らるる近江

(大津)宮
は、
本来
下
口
大宰府
乃

のことであつたろう

と仮定して、大宰府の遺構に示されている

4,579¹/₂

天つき
改行

歴史と合致するかどうかを見てみることにし

よう。

すなわち

を追って

文献上の近江宮の記述と、
年代順次直列

献上の日大宰府の記述とを、
大宰府の遺

に連らね合わせ、
さらに

構が語る歴史と突き合わせてみて、
うまく

解釈出来るものかどうか

を検討してみたい。

*

天つぎ
改行

西都大92^P 2行 西都大91^P 1/2 4,580^P 大宰府遺跡 29^P 4,582^P 末に同文 4,581^P

大宰府の都府楼跡の発掘によって判明した
このは上層・中層・下層
この地区が三つの層からなっていて、そ
れぞれの層に遺構が存在する
というものである。
【第一期】（最下層）
第一期建物（掘立柱建物）は、
八世紀中葉頃から以後、天智天皇によつ
て朝堂院形式の宮が造られる以前に、存在し
ていたものであろう。
と考えてみたい。
第一期に位置づけられる遺構は、三棟の建
物と少数の土壇および柵列である。
建物に共通しているのは、いすれも掘立柱
建物の礎石ではなく、檜皮びきあるいは板ば
きの屋根で瓦を使用していない点である。
この第一期建物が政庁地域でいう配置
であったのか、検出された三棟だけでは何と
もいえない。しかし、確実に言えるのは、
①第

4597^P

4585^P

2067

1192
194
406

45.8.19 午前 11時 57分
2076

大宰府 92P
4,581P

大宰府 92P 3行
大宰府 92P 6行
改行

一期建物と第二期・第三期の建物とは性格的に全く異なっている。
一期にはまだ二・三期のような朝堂院形式の建物配置になつていない。
政庁地区全域にわたる大規模な整地を行なつてゐるが、この整地層にふくまれてゐる須恵器を検討すると、いままで小田富士雄氏などによつて編年されてきたⅥa式のものと、それより一形式後出の須恵器Ⅵa式が混在し、量的にはⅥa式が多い。
Ⅵa式は古墳などからも出土し、七世紀中葉頃と考へられており、大宰府工式はそれ以後（七世紀中葉以後）のものである。（西都大宰府「日本放送出版協会、九一九三頁参照」）
第一期整地は、七世紀中葉頃に行なわれ、それ以前にⅥa式の須恵器および大宰府工式の須恵器が、この地区へ持ち込まれては不注意などで壊れ、地面上に散らばつた。

④4580^pに同文

アノキウニ
採収1529^p

4,582^p

なお
次頁419

ひげん 元1933^p
付言 付け加えて言うこと

「とつて」④4553^p ④4595^p

天つぎ
改行

というところを、
●そこで今日、
工式の須臾器が、
であらう、と想到される。
■ところで、
式が、
第一期は、
へ七世紀中葉頃から以降、
い時点までの期間、
を想定してもよいように思われる。
■
日Ⅱ式Ⅲの次の日大宰府工式Ⅲは、
然終ったのであろうか、その時点（第二期の為た
整地された時点）を見ると、
式Ⅲの方が数多く破損しており、
式Ⅲの方は未だあまり多く壊れていなかった
た
というところ、
■ここに、第一期として、
へ七世紀中葉頃から以降、天智六年（六六

整地層内から

④ 4538°

⑤ 4540° - 1/2 未 4,583° - 1/2

紀下364°

④ 4538°

⑤ 4540° - 1/2

七) 三月の日大津宮への遷都に直後頃までの短い期間

を考慮してみたい。

なお、天智称制四年(六六五)九月に唐の郭務悰らから来朝した時、日菟道に大がかりな脱兵を行なったという。

・天智称制四年十月十一日条に、
「大きに菟道に脱す」とある。

・先述の述べるように、

天智称制四年(六六五)当時、大宰府の宇智山にあたり、何等かの施設があったのであろう。

と推察される。(第八十三章へ唐の郭務悰ら再来日)の項において既述

も、一かいたら、大宰府の第一期に位置づけられる遺構近傍で、大がかりな脱兵が行なわれたのかも知れない。(要検討)もな定かならないことである。

*

①-11

1-4 天智の
平治の大野に馬並めて

④ 852°

板前
~~852~~ $\frac{P}{2}$ 81-11^P

コクヨ ケー20 20×20

4.584P

458P 1997

紀下380' 4572' 21分

4591' 14分

天つぎ
改行

【第二期】

(中間層)

第二期建物

(朝堂院形式をもつ建物)

天智初制六年(六六七)三月の大津宮へ

遷都直後に建立され、

天智十年(六七

一)十一月二十四日に炎上したのであろう

と考えた。

第二期になつてはじめて、

礎石を使用し、

屋根に瓦をのせた。朝堂院形式の建物が創

建された。

以下、第498図、写真図版721、722

参照

第二期において

礎石を据えた中門

および南門をつくる起工にさきだち、建築儀礼の

ために須臾器の壺が埋められたようである。

その壺は七世紀末から八世紀初葉の形式をも

ち、第二期の建物がたてられた時期を示して

いる。(「西都大宰府」藤井功、日本放送出

版協会、六二頁参照)

ここに「壺は七世紀末から云々」とあるが、

天智初制六年(六六七)三月直後もかうい

世紀末に算入出来得ようか。

さて、屋根に瓦を使用することは、寺院建

632 672 901/13

4,585¹/₃

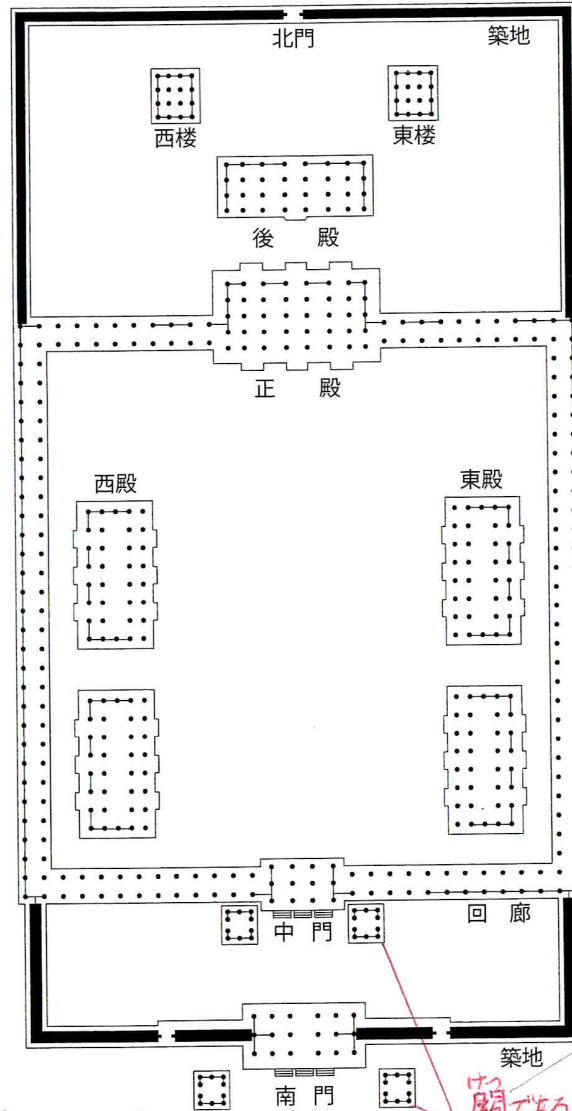
・白星

・右頁全面に大きく

『新・大宰府』第1巻

203頁と同様に

掲載下さい。



(第25図と同一)

第498図 大宰府政庁の建物復元配置図 (第Ⅲ期)

①『太宰府遺跡』鏡山猛、ニューサイエンス社、36頁。

②『西都大宰府』藤井功・亀井明德、日本放送出版協会、55頁等参照。

- ・中門は、炎上後に再建されている。(②-63頁)
- ・西殿の二棟からは、焼土が検出されなかった。(②-74頁)
- ・西殿、東殿、正殿の範囲内は、すべて石敷きであった。(②-74頁)
- ・もしかしたら、大宰府炎上時にはまだ、西殿、東殿の四棟が存在していなかったのかも知れない。(※平城宮、大極殿南側の全く建物が無い広大な「石敷広場」参照)

内蔵 後殿 4595¹/₆ 行

大極殿 正殿 4594¹/₁₄ 行

4592¹/₂ 5行
西殿・東殿

南門に相当 南門と中門の間

大宰府と観世音寺、4頁右に
朱雀門に相当 4599¹/₅ 行

ハッ
目
殿
です。

← 新代 ① - 203¹/₃

政庁近衛園 4591¹/₃₄
4565¹/₁₂ 行

539¹/₃

4,585⁷ - 2/3

- ・カラー
- ・左頁の上半分に大きく掲載下さい。

- ・次頁の写真の幅と同一にしておいて下さい。



は日付

1409

写真図版 721

そば

とふろう

空から見た都府楼

「大宰府政府」は

「都府楼」ともよばれる。

(広辞苑他参照)

4,585^冊-3/3

- ・カラー
- ・左頁の下半分に掲載下さい。
- ・前頁の写真の横幅と同一にしておいて下さい。



前頁の写真に碑が
正殿にある
せいび
④ 4594^冊 9頁

1486

写真図版 722 とふろうあと せいびあと
都府楼跡 (正殿跡)

1306

日本の山河⑧ 『福岡』 奈良本辰也監修 国書刊行会 昭和52年4月20日発行 8~9頁参照
541

宮闕云556^{ぎやうけつ}

4,586⁺

官舎云492⁺
藤原遷都 紀小 持統8年694年

「大津京」120⁺
扶桑略記 68⁺
7世紀末

西都大宰府 93⁺
603 R. 1208
法興寺 3604⁺
法興寺 3604⁺

築^{つく}においては、飛鳥寺^{あすかでうら}のよう、六世紀末^{まつ}から早くも一般^{いっぱん}に行なわれていた。では、瓦^{かわら}を宮殿建築^{きやうてんけんちく}に採用^{さいよう}するようになったのは、いつ頃^{ころ}からであらうか。

① なるほど、扶桑略記^{ふさうりやくき}に持統天皇^{しとうてんかう}十一年（六九七）八月一日条に「天皇^{てんかう}之代、官舎^{くわんしゃ}始^{はじ}以瓦葺^{いかわづき}之」と記^しされてあり、藤原宮^{ふじわらみや}の官舎^{くわんしゃ}口^{くち}に始めて瓦^{かわら}を使用した、という事実^{じじつ}が分かる。

と、しかし、官舎^{くわんしゃ}とは官吏^{くわんし}などの住宅^{じゆうたく}の二へ持統天皇^{しとうてんかう}の藤原宮^{ふじわらみや}の時^{とき}から、官舎^{くわんしゃ}の屋根^{やね}にさえも瓦^{かわら}を使用^{しやうよう}するようになった、瓦^{かわら}の使用^{しやうよう}がかなり一般化^{いっぱんか}した。

と解^{かい}すべきかも知^しれない。

では、大極殿^{たいごくでん}・朝堂院^{ちやうどういん}・宮門^{きやうもん}（南門^{なんもん}）・朱雀門^{しゆくまもん}等々の宮闕^{きやうけつ}の屋根^{やね}への瓦^{かわら}の採用^{さいよう}は、藤原宮^{ふじわらみや}以前^{いぜん}にさかのぼれるであらうか。

② 日本書紀^{にっぽんしよき}に斉明天皇^{さいめいてんかう}元年（六五五）十月条^{じよう}には、小墾田^{こけんでん}に、宮闕^{きやうけつ}を造^{つく}り起^たてて、瓦^{かわら}葺^ふに擬^なせ

中10巻
596年11月
法興寺完成

H.S. 8.20 (金田) 19-442
↑

三隆寺 田田 301¹ 至虫 1398² 厨子 1190³
③ 3699¹ ~ 3701² 百科 19-442 4,587³

天つぎ
改訂

697 694 藤原寺部
655 655
39
④ 4415³ (王虫のびのこ) 655
42

降寺の金堂よりも古風を示している異が認められ、
そのて、屋根の形式や雲形肘木その他に、法
には、雲形の肘木(斗拱)を用いられている。
き、瓦は行基葺きとされてあり、軒下の組物
屋根は寄棟造りに切妻を重ねたような鋸葺
・玉虫厨子は法隆寺に伝わる宮殿型の厨子で、
べた^{たまむしのづし}あ^{きやうでんかた}の玉虫厨子である。
現在にまでも伝えている。それは先に述
③ さらに、推古朝の小墾田宮の宮殿の屋根に
瓦を使用していたことを思わせる貴重な遺品か、
という意味かも知れない。
藤原宮の地^{ふじのわらう}へ、ついに宮殿は遷さなかつた
ので、倭国(大和国)の小墾田と称される地(後の
を用いていたが、その材が朽ち腐れてきた
大倭国(肥後国)の小墾田宮の屋根には既に瓦
この記事は、第八十二章で述べたように、
宮殿に瓦を使用する気運があつた。
とおり、藤原宮遷都(六九四)の三十九年前にすでに
記されて止めて作らうとした。
↑ 将とす。又深山広谷にして、宮殿に造ら
↑ むと擬する材、朽ち爛水たる者多し。遂に

改行

4,588P

南都 前殿
ひだり
ふき

4586
20行

同文
第3974P

同文
第3701P

45

られ、あたかも当時の建築のひな型を見よ
うである、という。(第七章。「法隆寺」
所田甲一、三〇一頁。「世界大百科事典」平
凡社へ玉虫厨子参照)

・つまり、
玉虫厨子は法隆寺の金堂よりも古風を
示す。日瓦覆の宮殿型の厨子である。

・おそろく、推古朝の都、大倭国(肥
後国)の小墾田宮の大極殿または宮城正門の
朱雀門の特色を模して、玉虫厨子は作られ

たのであろう。
とはいえ、聖徳太子の理想の実現の為には

早急に、多くの巨大な陵墓を築造せねばなら
なかつたし、奈良盆地北端の大湿原を埋め立
てねばならなかつた。多大の労力を要する
大事業ではあつたが、最優先で行なわなければ

ならぬことであつた。
そこで、推古天皇の後に続く各天皇は、自
らのことについては質素倭約を旨とし、
日瓦葺きの宮殿を造ることも遠慮された

のであろう、と思われ。

ワケの... 1843P
判明 明瞭に示すこと
④4584
1945 正期-瓦

4,589P

あかみとり
朱書 紀下474Pルビ
紀下474P 紀下279P 紀下246P

■ 例えは、

● 皇極二年（六四三）四月、皇極天皇は飛鳥
板蓋宮へお移りになったという。

● 孝徳大化元年（六四五）十二月、孝徳天皇

は都を難波長柄豊碁へお遷しになったが、この

前期難波宮（天武朱鳥元年にその大半を焼失

は、発掘調査の結果、一掘立柱建築等であり

屋根瓦を使用していない、ことが分かったと

（「日本史辞典」東京創元社、八難波宮）参

照

● 7 齊明元年（六五五）正月、重祚さ

た齊明天皇は、飛鳥板蓋宮で即位された。

■ 恐らく天智天皇は、聖徳太子の理想を全

否定されたというわけではなく、白村江での大

敗以後の難局を乗り切るこの方々、より重

視されたのであろう。

● 大宰府の地に造営された朝堂院形式の都府

楼には、一海北の唐・新羅軍を威圧するか

のように、重々しく、瓦が葺かれたのだった

近年の大宰府発掘調査によって判明し

瓦
④4584
951

みち
余地 2284

4.590P

天つぎ改行 1982
土師器 焼土の土師器

中門に火 240¹~4/5 14⁹⁹

た新事実^{しんじつ}は、第二期^にの遺構^{いこう}面に多量^{たくりょう}の焼土^{しょうど}が
堆積^{たいせき}している、という^いことである^{ある}。
●この焼土^{しょうど}は中門^{ちゅうもん}の西側^{さいがわ}、特に西南隅^{せいなんすみ}に多く
堆積^{たいせき}し、^いかも層位^{そうゐ}的^{てき}にたどると、この焼土^{しょうど}
堆積^{たいせき}の上に第三期^{さんき}の礎石^{そせき}がのっている^い。
堆積^{たいせき}は西南隅^{せいなんすみ}では厚^{あつ}い^いか、中門^{ちゅうもん}のほぼ全域^{ぜんいき}で
うすくみられ、これが大規模^{たいきぼ}な火災^{かさい}、炎上^{えんしょう}に
起因^{きん}している^い。これは明らか^{あきこ}である^{ある}。つまり、こ
の炎上^{えんしょう}後に第三期^{さんき}の中門^{ちゅうもん}が再建^{さいけん}されてい^いる。
という^い。(「西都大宰府^{さいとだいざいふ}」日本放送出^{にっぽんほうそうしゅつ}
版協会、六三頁参照^{ろくさんえいさんしやう})
■もつとも、不審^{ふしん}に思^{おも}える^いことがある^{ある}。
「焼土層^{しょうどそう}から検出^{けんしゅつ}された土師器^{はじき}は、平安中^{へいあんちゅう}
期頃^{きこう}の年代^{ねんだい}を示^している^い」
という^いのである^{ある}。(「西都大宰府^{さいとだいざいふ}」六三頁)
●この土師器^{はじき}は、どんな^{なん}状態^{じょうたい}で出土^{しゅつど}したの
だろう^いか。
●疑問^{ぎもん}の余地^{よち}もなく、
「焼土層^{しょうどそう}中に平安中期頃^{へいあんちゅうきこう}の土師器^{はじき}が混入^{こんにゅう}」
●その後^{そののち}(平安中期頃^{へいあんちゅうきこう}以後^{いご})、第三期^{さんき}の中門^{ちゅうもん}が
再建^{さいけん}された^い

というのであれば、いうまでもなく、

△第二期の建物が、天智十年（六七一）に

炎上し、その後まもなく第三期

の建物が再建されたのであろう。

とするこの物語の仮説は、成り立たない。

になる。

■しかし、第二期の焼土層の中に、何等かの

事情によって、平安中期頃の土師器が入り込

んでしまったのかも知れない。

・第二期の焼土層中に、どのような状況で

平安中期頃の年代を示す土師器が検出されたの

だろうか。より詳しい考察を待ちたい。

天智紀十年（六七一）十一月二十四

日条に、

近江宮に災けり。大蔵省の第三倉より出

でたり。

と記されている。

参考次に述べると、

大宰府政庁の西と東には小丘陵があつて

天武朝ころ

4592-1/2
1497~1507

焰云2047
4584
4766に同文
「大宰府遺跡」33頁に
図あり

4591-2/4
2404/5

省は後代の偽記であろうという
紀下380頁9

このうち西側の丘は「蔵司」と呼ばれてお
り、その名のとおり倉庫があつたにちがひな
い。
（第499図、写真図版723）
という。「奈良の都」虎尾俊哉、講談社、
一四〇頁参照）
・あるいは、大宰府政庁の西方の小丘に「蔵
司」（大蔵省）があつて、その第三倉から出
火し、折からの陰暦十一月の「西風」にあお
られた火は、またたく間に燃え広がつたのか
も知れない。
東の方へ
・そして、
へ猛り狂つたように、火の粉を散らして燃
え盛る。焰は、大宰府政庁へ迫り、――つい
に、「中門」へ燃え移つたのであろう。切
と想像される。
の東西の脇殿には、火が及ばなかつた。
・朝堂院内の発掘調査を行つたが、焼土は検
出されなかつたのである。

4,591^P-3/4

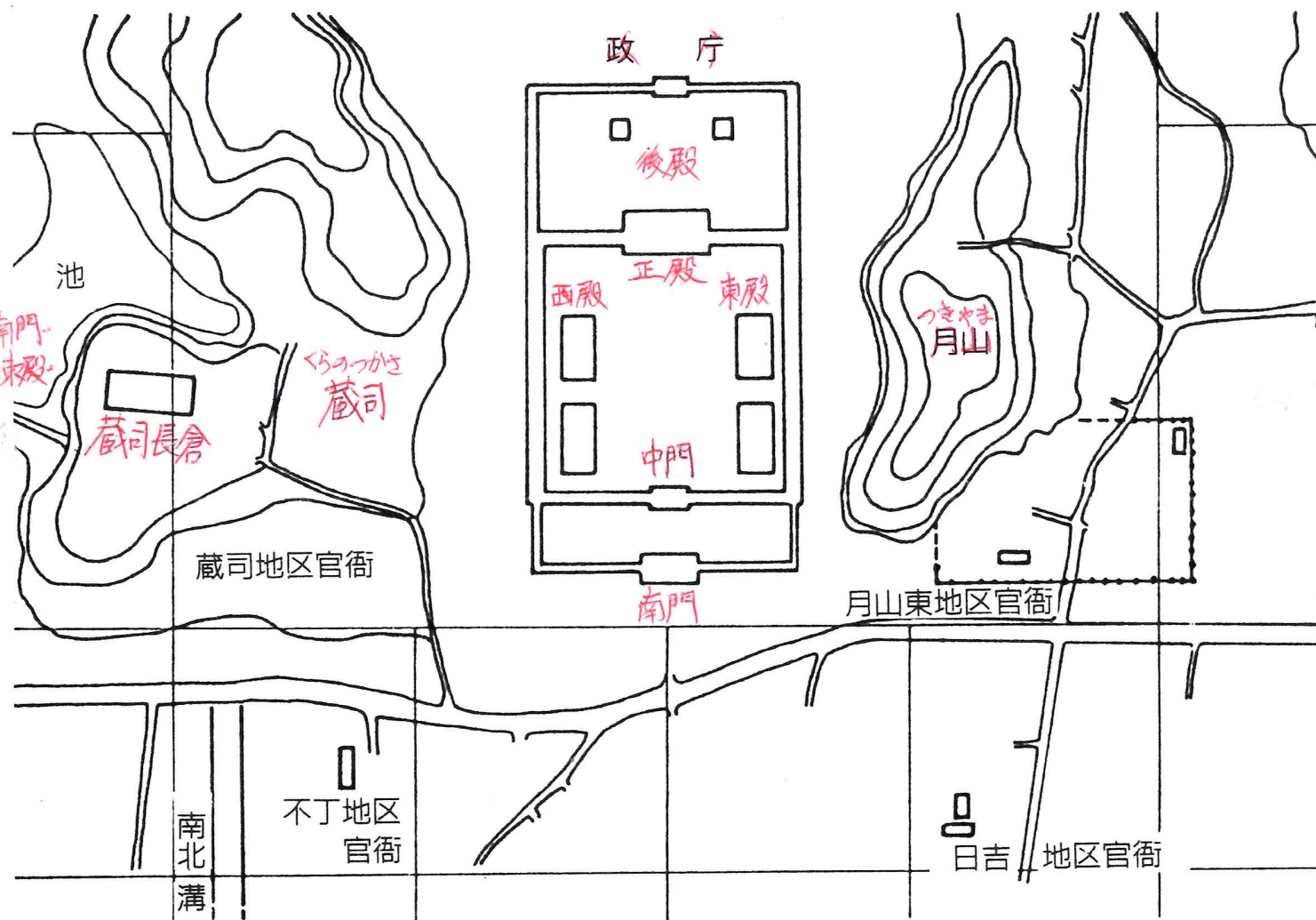
4760^P 山

・右頁上半分に、
大きくはみ出して
掲載下さい。

・政庁・後殿・正殿・中門・南門・
蔵司長倉・蔵司・西殿・東殿

月山

の10ヶ所を、
太いゴシックで
入力下さい。



1429

第499図

大宰府政庁近傍図

1329

『大宰府と観世音詩』高倉洋彰、図書出版海鳥社、1996年11月10日発行、12頁

『西都大宰府』藤井功・亀井明德、日本放送出版協会、昭和55年9月20日5刷発行、43頁参照
549

4585^P-1/3

大宰府正庁の図

4760^P 月山

4,591^P-4/4

・右頁下半分に、
大きく掲載下さい。



14QG

13QG

写真図版 723

^{くらつかさ} ^{なが} ^{くら} ^そ ^{せき} ^{れつ}
蔵司の長倉礎石列(昭和8年撮影)

『大宰府遺跡』^{かがみまたれ}鏡山猛^{そせきぐ}、ニューサイエンス社、昭和54年10月15日発行、37頁参照。

12) 台地の西端に残る礎石群は、東西に長い9間×3間総柱建物跡で、^{えんざい}円座のくり出し^だが見られる。

13) 総柱なのだから40個あった筈だが、23個現存、17個失われている。 550^P

天の宮
改行

4,592^P - 1/2
せ人 ④494^P - 1/2 ④4599^P
増広 1258^P 増「倭人伝を読む」199^P 対称 ④1337^P ④4584^P 回廊 OK
新南切抜き、主軸の増と増、奈良時代という。 平城宮の南に新南切抜きとある。 大分社 新南切抜き

回廊で囲まれた朝堂院内（正殿と中門との間の朝庭内）に、中軸線を対称として東西に脇殿の南・北棟があることは、地表に残る礎石から分かっていった（第499図）
東脇殿を「東殿」、西脇殿を「西殿」と呼び、それぞれ南北に二棟ずつ、合計四棟配置する。
調査の結果、
①建物基壇の化粧か、
②そして、朝堂院北端の正殿・東殿・西殿によつて囲まれている広場は、すべて石敷きである、という重要な事実が明らかになった。
③しかし、東殿・西殿の両建物とも焼土は検出されず、また下層の遺構はつかめなかったという。（「西都大宰府」藤井功・亀井明徳）
日本放送出版協会、七三〇七四頁参照）
■なるほど、中門あたりは炎上したか、幸運にも朝堂院内の東殿・西殿に火が及ばなかった、ようにも見える。

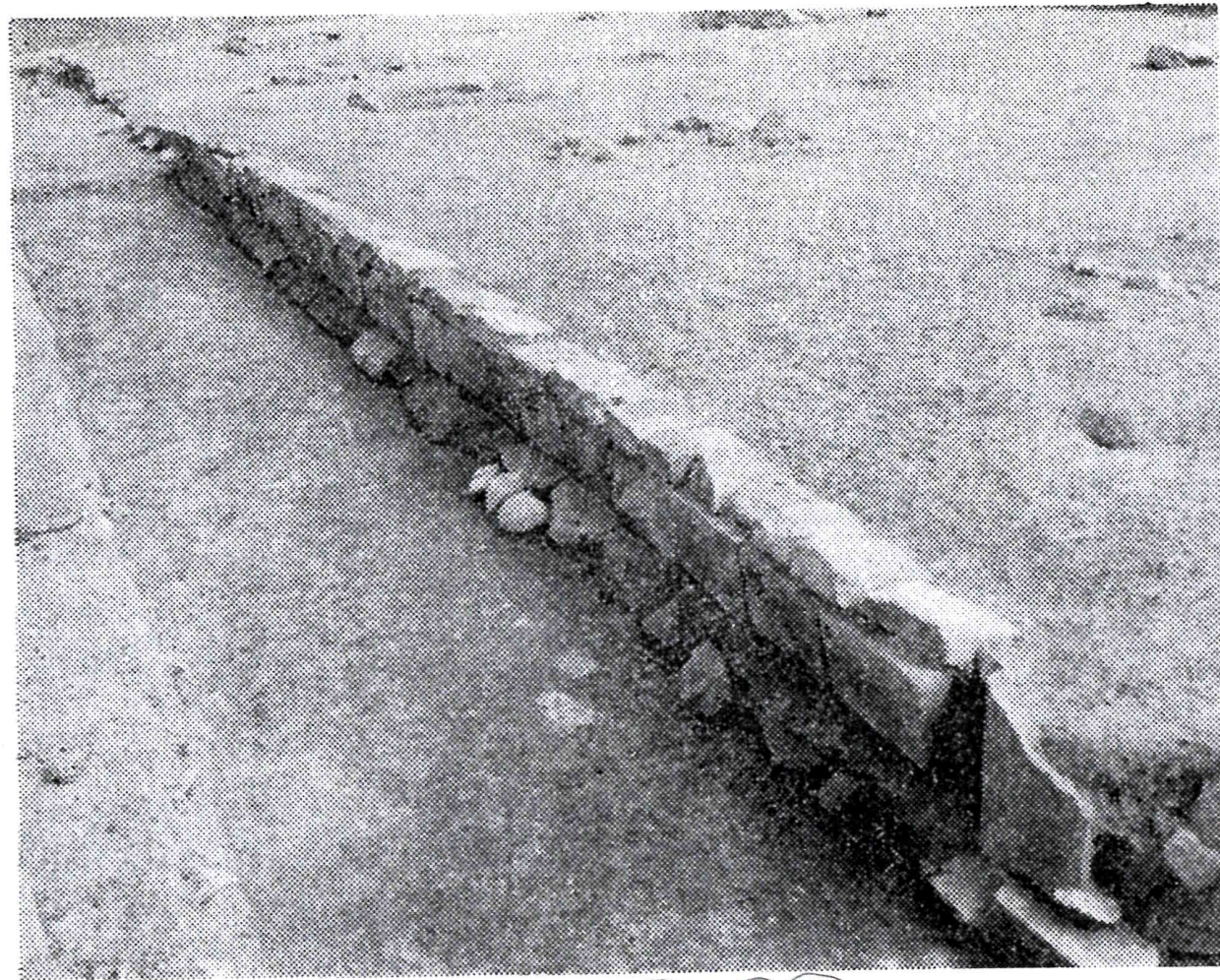
みかど^P
新和100

④4585^P
- 1/3

新和(11)-205^P
204^P

4.592^P 3/2

- ・ 頁の上、1/4頁に大きく掲載下さい。



写真図版 724 ^{わきでん} ^{きたん} 脇殿の基壇

^{かがみ} ^{またが} 『大宰府遺跡』 鏡山猛、ニューサイエンス社、昭和54年10月15日発行、33頁参照。

新刊 07-203^P 大宰府政庁

あと 111^P-1/2 正城堂の一次朝堂院の礎石建物4棟と似ている。

552

「平城京」町田平
32°36'37"

オーツ大極星は
5089¹
広大な石敷き広場

相違つくる

4,593^P - 1/2

まつた^ととの
廳¹⁹⁵

せいさう
政庁¹²²⁷
政務をとりあつかう役所

5089¹
天智改元

天智6年以降^{天智改元か?}
4585¹

■だが、あるいは、第二期（天智七年頃から
天智十年炎上まで）の回廊の内は、
へ建物（^た）が一切無い、単なる石敷きの広場
だったのかも知れない。
・倭国（大和国）の天智天皇の都が首都とさ
れ、筑紫国の大友天皇の都は副都とされたの
で、
をつかさどる為の日廳（政庁）は不要とさ
れたのであろうか。
ここに予め述べる、
へ副都とされた大宰府のこの広大な石敷
き広場（^き）が、――平城宮の初期の形式に
反映されているのであろう。
と想像される。（第八章へ天武十三年に
定められた第三番目の都の項において詳述
したい）
■炎上後（壬申乱の直後頃）、天武天皇によ
って再建されたと推察される第三期前半の大
宰府政庁においても、回廊の内は、第二期に
引き続いて建物が全く無い。石敷きの広場

おほとも
大友天皇即位の

大友天皇即位

なうちよう
奈良朝 乙1674

4.593^p - 3/2

次頁
から

と文ぶん小こていたことであらう。
■ところかどうしたわけか、奈良朝頃なうちように至つた時、日せ墾けんに積みの「東殿」・「西殿」各二棟づつ（計四棟）の脇殿が、その日石敷きの広場の内に建てられた、ということなのであらうと思われる。
■すなわち、回廊内かいろうが石敷きの広場であつて、建物たてものが無かつたならば、どんなに火勢かせいが強か

のてはなからうか

正殿 ④240²×4/5
焼けたかどうか分からない
4,594^P
④4585-1/3~2/3

「平城宮」の一次大極殿は元々
石敷き広場
④4591^P 3/4の図
→→→→

ううとも、炎上しようもないわけである。
・尚、カーもそうなら、この回廊内のことを
朝堂院と呼ぶのは不適切であろうがい
朝堂院に準ずる所であつたらうから、この物
語ではあえて朝堂院と呼称する
■朝堂院の北端に位置する朝正殿は、政庁
の中心的な建物で平城宮における大極
殿に相当する。現在高き一坪の基壇がほぼ完
全な形で残り、三六個の礎石が盛時の姿を
第498図 写真図版 721・722 参照
うふつさせる。また、正殿の礎石は、他の建
物の礎石に比較して巨大で、柱座のつくりが
丁寧である。
・正殿はまだ発掘されたことがないので、そ
の構造などの詳細について正確には分か
らない。(「西都大宰府」藤井功、日本放送出
版協会、七〇七七二頁参照)
この位置で、同じ構造だったのか、それ
とも中門と同時に焼失してその後建て替へ

前頁へ

「奉迎の都」 140P
④ 4571
「大宰府」 22P
「日本の火」 249P
④ 4570
「ヒコ」 4582P
④ 4572
4,595P

ちゅうおう
中枢 1443P
官衙 484P
築地 1470P
役所 官庁

新刊 11-205

西海大宮 77P

られたのか、現時点では判断できな

■後殿地区は、内裏に相当するが、地表

に礎石は全くみられない。

・しかし、江戸時代の礎石調の古図等には

礎石が記されているという。

・ともあれ、後殿地区の当初の建物が、掘立

柱式だったのか、礎石の上に建てられていた

のか不明であり、また、焼失したのかどうか

等についても現在のところよく分らないとは

きなり。

■大宰府政庁の中枢部と、いうべき官衙は、

築地へ土堀の上に屋根を葺いたものによ

って囲まれていた。

■ところで、北面の築地から山裾まで、さらに

ハの形の平地の余裕があり、この北面築地の

北側一帯にも役人達の居住区があったろうと

する説があるという。――西都大宰府に藤井

功、日本放送出版協会「八四頁参照」

そういえば、大宰府は「東西二十四坊、南

北二十二条」の大きさであったろうと現在考

新刊 11-202
8行 27
11

後殿背後の建物

わすか
僅 2376
・ちよといふのかと
いふに分らない

4,596^P

洛陽の記95^P

えう水ているが、一、東西方向の長さが、
南北方向の長さよりも僅か二坊（条）分だけ
長く、
へほんの少一だけ、正方形と違う。
というところが気にかかる。
あるいは、北面築地より北の方に、さらに
二条分広く考え、みる必要があるのかも知れ
ない。
つまり、
へ大宰府は、一東西二十四坊、南北二十四
条の正方形の、やや北辺寄りに政庁を置い
ていたものであろう。
と想像してみたい。
・~~甲~~てんてん、大宰府もまた、~~日~~長安城の
様式でなく、日洛陽城の様式を踏襲して
いるのであろう、と思われる。
・すでに述べたように、
へ洛陽の都には、周初の創建当初から、宮
城域の北側に居住の爲の日城北地区が設け
られていたものであろう。

と推察される。（第6図参照）

＊新刊 85^P